

全道各地に育つ 産業クラスター活動

ルライター 滝川 康治

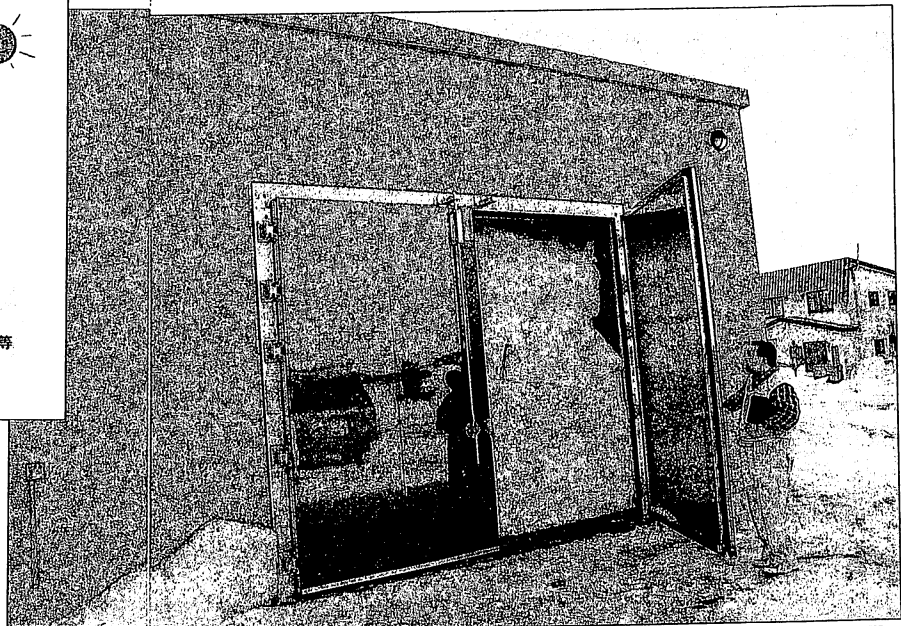
官依存から脱却なるるか 地域資源で起業を模索

産学官の連携で 雪冷房を具体化

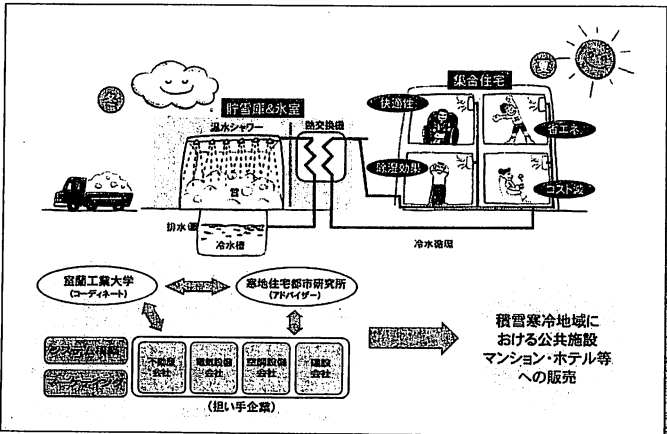
美唄市内で建設中の賃貸マンション「ウエストパレス」(鉄筋コンクリート6階建て、24戸)で、雪を冷房に活用する試みが始まった。三月中旬、マンション隣の貯雪庫(写真参照)に百トンほどの雪を投入済み。夏は住宅の冷房用に、秋から冬は野菜などの貯蔵庫として使う独自の取り組みである。

産業クラスター活動を支える財団法人・北海道地域技術振興センター(略称・HOKTAC)が地元企業と共同で進める「ビジネスプラン推進事業」の一つ。システムの考案者は、沼田町のもみ貯蔵施設づくりなどの実績をも

産学官の連携で、公共事業に偏重した中央依存型経済からの脱却をめざす、産業クラスター活動が各地で活発化している。模索のなかから、具体的なプロジェクトも立ち上がってきた。美唄市での「雪冷房システム」の試みや、「森林クラスター」を追求する下川町の事例などを紹介しながら、課題を考える。



美唄市内のマンション敷地の一角に建設した貯雪庫。100トンの雪を入れておき、冷房や野菜の貯蔵などに活用する。



室蘭工大の研究者が考案した「雪冷房システム」の概念図

デアが結びついたわけだ。このシステム、設備費に二千万円ほどかかった。永桶さんは、補助金を使うことを模索したが、行政はまだ雪に価値を見いだしていなかったとか。強力な助っ人がHOKTACだった。永桶さん担い手企業は費用の三分の一を納め、実施主体のHOKTACが事業を行ない、五年後に企業側に移管する方式。月一回の現地会議もある。「これは中小企業をバックアップする良い方法。企業を育て実行させるまでやるのは、本来の補助金の姿と思う」と永桶さんが評価する。このモデル事業は道の財政支援を受けているが、従来型の補助金システムとはかなり違う。官依存の企業経営から脱皮する可能性を秘めた手法になりそうだ。

マに勉強を重ねてきた。マンションの建主で不動産業を営む永桶裕明さん(44)は、研究会の中心メンバーである。昨年初め、「住宅で雪冷房をできないか?」という話になり、会のなかにプロジェクトを組んで調査を始めた。永桶さんにはマンション建設計画があり、それと堀山さんのアイ

永桶さんは最近、雪冷房システムの

つ、室蘭工大助教授の堀山政良さんだ。貯雪庫は床面積六十四平方メートル、高さ四・五メートルの大きさがある。夏には、床下の水槽にためた雪解け水の冷熱を利用し、熱交換機を通して一度ほどに冷えた不凍液がパイプで各戸に送られ、居間に設置したファンによって二四、五度の室温に保たれる仕組み。秋以降は残った雪を利用する。空いたスペースに野菜類を保管し、出荷調整や熟成に役立てたり、温蔵庫に活用する道も探っている。

商工会議所の会員や農家などが集まり、市が首頭をとって二年前に発足した「美唄自然エネルギー研究会」の活動のなかで、雪冷房の事業が具体化した。市は堀山さんをアドバイザーに招き入れ、研究会は利雪や未利用エネルギーの活用、雪と町づくりなどをテ

販売会社を設立した。「公共施設を建てるときに、このシステムを導入しようセールスしたい。スリム化して初期投資価格を下げて、北海道の夏は雪で冷房するのが夢。北陸方面などにもPRしていきたい」と新たな事業展開に意欲を見せる。民間企業と研究者・行政の試みを財団が支援するなかで、新たなビジネスの芽が育ちつつある。これからの公共事業を考えるうえで、雪という身近な素材を活かした取りくみは、さまざまなヒントを与えてくれる。

新産業づくりで 経済の活性化へ

一般にはまだ馴染みの薄い「産業クラスター」とは、取引や技術、情報、人材などの面でつながりをもつ産業群をさす。地域の特色を發揮して、競争力のある産業を中心に、関連する支援産業や新規産業の群れ(クラスター)を創って競争力を高め、雇用を生み出すことがその狙い。最終的には北海道を、公共事業に偏重した中央依存型経



下川産業クラスター創造シンポジウム

1年間の活動成果を報告した下川町の「クラスター創造シンポジウム」(3月30日)

の活動とは違って、幅広い住民が集まり、地域づくりを視野に入れた議論を重ねているのが特色だ。

同町の森林組合は、木炭研究の第一人者・杉浦銀治さん(東京在住)らの助言を受けて、八〇年代初めからカラマツ間伐材による木炭製造を始めたのを皮切りに、さまざまな炭関連商品の開発や集材加工に取りくむなど、沈滞

ムードの林業界のなかでは卓越した事業展開をしてきた。また、町内には森林体験ツアーの開催や木製品づくりなど意欲的な取りくみもある。

一昨年、HOKTACのスタッフらがこうした試みに注目し、道経連の会報で「下川に森林クラスターあり」と紹介。森林組合や行政関係者の中で活動に向けた機運が高まった。

係者、エミュー牧場主、主婦、菓子店主、農家……と多彩。「ブランドデザイン」「商品開発」「木材加工」のワーキンググループもつくった。

「各種団体のリーダーが集まる従来のやり方ではなく、真面目に考える市井の人に声をかけた。ただ、木材加工部門だけは経営に近い人たちが集まった」と、副会長の細田直志さん(森林組合職員)が多様な顔ぶれを集めた理由を解説する。「ブランドデザイン」を議論することで、商品開発に理念を持たせ、森林の町づくりにつなげようとする意気込みが感じられる。

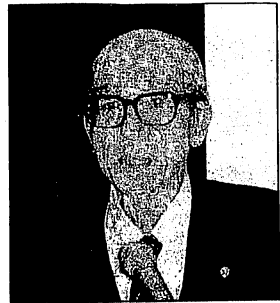
「いままでと違った森林や林業をベースにした新たな産業づくりが必要だと感じていた。正直言ってクラスターでなくても良かった」

「町内に商品開発のアイデアがあっても、それが実践的な動きにつながらず、次の展開を模索していた。一部には林業の将来に対する危機感もあり、「やろう」となった」と、

両者が当時を振り返る。昨年四月、三十人ほどで下川産業クラスター研究会(山下邦広会長)が誕生した。会員は、森林組合や商工会の職員、木材・木工関

が、過疎の町の寄せ集め集団ゆえに、横文字や抽象的な概念が多い、この活動を理解するには時間がかかったらしい。自由討論方式でアイデアを出し合っても、「クラスターそのものが分からん」「ブランドデザインって何だ?」といった調子で、活動の主旨が浸透するまでに半年ほどを費やす。道内外の研究者や企業関係者を招いた講演会やフィールドワーク、グループ別の議論などを精力的に積み重ねた。

三月二十日には、この一年間の活動内容を報告する催しが開かれた。



「北海道版クラスター」を提唱する道経連の戸田一夫会長

済から脱却させて、自立型の経済構造への改革をめざす試みといえる。

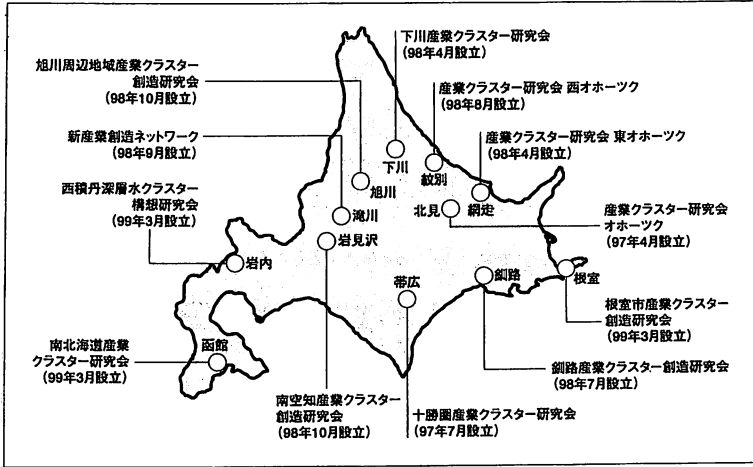
戸田一夫・北海道経済連合会会長が呼びかけて、九六年に「北海道産業クラスター創造研究会」が設立された。「た

る技術やノウハウの集積「北海道発の事業創造」などを挙げる。それらを物心両面で支えるHOKTACには、北電や金融機関、道や札幌市などからの気鋭のスタッフが集まっている。

牽引役のHOKTACの活動は、各種調査の受託や担い手企業へのアドバイザーなどの派遣、モデル事業の支援

起業家をめざす人を対象にした講習会などと幅広い。これらの動きに呼応して、道内各地に十二のクラスター研究会も誕生した(別項の図参照)。

二月下旬、モデル事業に採択された五つのプロジェクトの発表をもとに、札幌市内でシンポジウムが開かれた。事業化にこぎつけたのは、



相次いで誕生している地域クラスター研究会

- ①新素材によるマルチング農法の確立(十勝管内)
 - ②イカゴロを原料にした釣り餌と製造プラントの開発(函館市)
 - ③オゾンを利用した衛生管理機器の開発(札幌市)
 - ④畑作用の自走式ハーベスターの開発(十勝管内)
- と、前出の雪冷房システムである。
- 「五件とも産学官の連携にこだわり、山あり谷ありだった。縦割り行政の業種に

森林を軸に議論 下川町での試み

人口四千五百人ほどの下川町では、「森林」を軸にした産業クラスター活動が芽生えている。若手企業家と研究者らの連携で新規事業をつくる都市型

とられない、検討会議やプランの段階では必ずユーザーに入ってもらい、最終成果は報告書でなく「事業化」である。これらが二年間のエキスでしよう(HOKTACの倉橋勝彦・クラスター事業部長)

「出てくる大学の研究者は限られていて、三十五歳くらいの研究者を前面に出して、人材を育てる必要がある」室蘭工大の畑山助教

「人が三分野から来ているだけで、産学官の連携は成り立っていない。社内研修に大学の先生を招いて鍛えるのが一番なので、もっと民間の人が働きかけてほしい」(菅広畜大の美濃幸輔教授)

デイスカッションでは率直な発言が続いた。三者の連携は口で言うほど簡単ではないようだ。

シンポジウムの開催などにとまってい
るところも多い。

草創期という言葉がふさわしいクラ
スター活動は今後、試行錯誤が繰り返
されることになる。概念や理論が先行
する傾向もなくはない。類似商品のオ
ンパレードに終わった苦い経験もある。
かつての「一村一品運動」とどこが違
うのか——といった声も聞く。

HOKTACの千葉俊輔副クラスタ
事業部長はこう言う。

「新しい公共投資を国に求めたら自立
がなくなる。運動論・政策論・ビジネ

ス論の三つがないとクラスターにはな
らない。テーマは地域で決めて、我々
はアドバイザーや人の派遣などをする。

北海道には危機意識が乏しいので、い
つも「補助金なしでやれるものを」と
言ってきた。でも、そうした考えを持
っていない経営者もいて、我々は目を
覚まさせようとしている」

まさに「走りながら考え、実践する」
である。官依存、公共事業経済に偏重
した北海道から脱却し、新しい地域産
業を創るにはまだまだ課題が多い。こ
れからが本番といったところだ。



道内各地で開かれている「クラスターシンポ」
(2月25日。札幌市内で)